

不登校児の保護者に対する支援のあり方に関する実践研究

—グループ・アプローチの活用効果について—

古屋 茂 中野 里美 畑屋 明
 (秦野市本町中学校) (秦野市教育研究所) (秦野市教育研究所)

岡田 守弘 芳川 玲子
 (横浜国立大学教育人間科学部教授) (横浜国立大学大学院教育学研究科助教授)

<要旨>

不登校の背景に関わる要因の一つとして、家族関係や家庭教育力が考えられるとすれば、保護者がいかに安定した気持ち、一定した態度で子どもに関わるかは、不登校児の発達を支援する際に重要なことである。秦野市の適応指導教室も同じ考えに基づき、保護者会を行ってきた。しかし、保護者は会について、果たしてどのようなものを求めているのか、またどのような取り組みが保護者に役に立つのか、についての検討はほとんど見られない。そこで、本研究は様々な取り組みを行いながら、保護者が求めている保護者会のあり方、さらにグループで行うことの有効性と限界について検討することにした。

その結果、①保護者会において具体的問題の解決を望んでいること、②グループ・アプローチが一般的スキルの獲得や理解に対して有効性を発揮すること、③その一方で、保護者一人一人が抱え持つ問題の多様性へのニーズに応ずる困難さが示された。

<キーワード>

不登校、保護者支援、グループ・アプローチ

はじめに

文部科学省（旧文部省）の1999年度「生徒指導に関わる調査」によると、不登校で年間30日以上欠席した児童生徒数は、やや足踏み状態にあるといっても、全国で13万人にも及ぶ数の子ども達が依然として不登校状態にある。また、状態像は多様化し、その背景は、児童期の少子化、核家族化傾向などの家族構成の変化や、地域共同体社会の人間関係（地縁関係）の崩壊などによる地域社会や家庭教育力の低下、異年齢集団による遊びの消失による子どもの社会性全般に渡る低下、私事化と称されるプライバシーの尊重により、他者を顧みない自己中心性や耐性の低さを示す子どもの増加、そして、学歴偏重や受験競争による弊害、情報化社会の歪みなどが複雑に絡み合い、時に、悪循環をなしている。

このような状況の中で、不登校児童生徒の支援を目的に開設した秦野市適応指導教室は、平成7年4月の開設以来、不登校児童生徒達の「心の居場所」と自立心を育む「場」の提供をその支援目標に掲げてきた。一方、不登校児童生徒に対する支援を進めていく上で、その背景・要因の重要な視点の一つと考える「保護者支援」についても、様々な支援策を試み、カウンセリング中心とした個別アプローチをはじめ、研修会への紹介、座談会、講演会などを開催してきた。このような保護者支援を進めていく中で、より深い支援効果を得るためには、定期的かつより具体的、実践的支援を講ずる必要性があるのではないかという認識をもつに至り、保護者会のあり方、さらにグループで行うことの有効性と限界について検討することにした。

<目的>

本研究では、不登校児童生徒を持つ保護者へのグループ・アプローチを試み、保護者会を通じた保護者相互の交流や個々の課題にあったより具体的な対応策を明らかにするため、①保護者の保護者会への期待、②グループアプローチの有効性と限界について調査を行った。

<方法>

調査手続き：保護者会として行った、内容の違う全7回(表1)のグループ・アプローチの中でのふりかえりと、各回終了時に記入したアンケート用紙を用いた。

第1回目のみ、保護者の認識を把握するために自由記述とした。2回目以降は、認識状況がわかり、表2の用紙を使用した。尺度は、「そのとおりだ」「どちらかという当てはまる」「どちらでもない」「どちらかという違う」「そうではない」の5件法を用いた。なお、アンケート用紙は、「エンカウンター学級が変わる②中学校編」(国分康孝監修)の中の「保護者会用アンケート」を本研究用に合うように改正し、用いた。アンケート内容は、①会の意義について(1項目)、②会の有効性について(3項目)、③会に参加したことによる安心感(2項目)、④他の保護者との心理的な相互交流(2項目)、⑤運営について(1項目)、⑥継続的な参加意欲(1項目)である。なお、今回は、研究目的と関連のある①と②についてのみまとめることにする。

表1 グループ・アプローチの内容

	内容
第1回 (6月)	自己表現、他者理解のテクニック 問題の提起内容
第2回 (7月)	気になる問題について、悩みの共有 を目指した話し合い
第3回 (9月)	進路について(自己理解)の話し 合い
第4回 (11月)	子どもへの関わり方(スキル)の学 習
第5回 (12月)	日常困っていることについての話し 合い

第6回 (1月)	不登校の受容を目指し、学校や登校 の目的についての話し合い 不登校の意味の吟味
第7回 (3月)	問題解決の方法(ソーシャルスキル) の学習

表2 アンケート項目

(1) 今日の保護者会は意味のある会であった。
(2) 自分が提示した問題について、解決の方向性が見えてきた。
(3) この会を通じて何らかの気づきがあった。
(4) 心を開いて参加することができた。
(5) 楽しく参加することができた。
(6) 他の保護者のかたの問題について、懸命に考えた。
(7) 他の保護者のかたは誠実に対応してくださった。
(8) 他の保護者のかたの問題が参考になった。
(9) 運営は適切であった。
(10) こういった会合があれば、また参加したい。

調査時期：2000年6月21日～2001年3月1日

分析対象：秦野市適応指導教室通室児童生徒保護者及び秦野市内不登校児童生徒保護者(小5の不登校児童生徒を持つ保護者から中3の不登校児童生徒を持つ保護者まで)

<結果>

アンケート項目の中から会の意義についての項目、(1)、会の有効性についての項目、(2)、(3)、(8)について「そのとおりだ」と肯定的な回答をしたものの%、各回の振り返り、アンケートの自由記述欄に書かれた内容に基づいて分析を行った。結果として以下のようになった。

①保護者の保護者会への期待

第1回の自由記述では、「具体的なかわり方などを詳しくもっとうかがいたかった」、「家にいるときの関わり方をもっと具体的に知りたかった」という内容が見られた。

アンケートでは「不登校の受容を目指し、学校や登校の目的についての話し合い及び、不登校の意味の吟味」を行った第6回、「進路について(自己理解)の話し合い」を行っ

た第3回の順に高い比率が見られた(図1)。

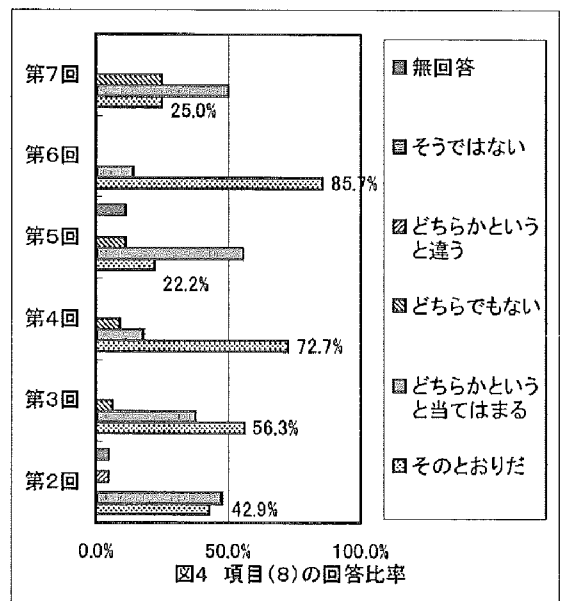
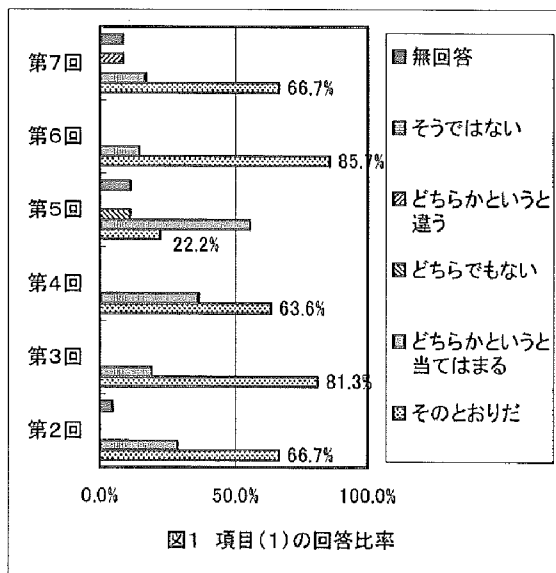
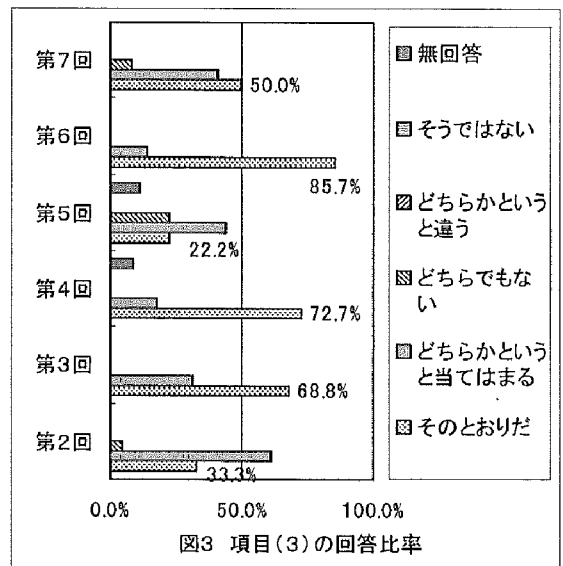
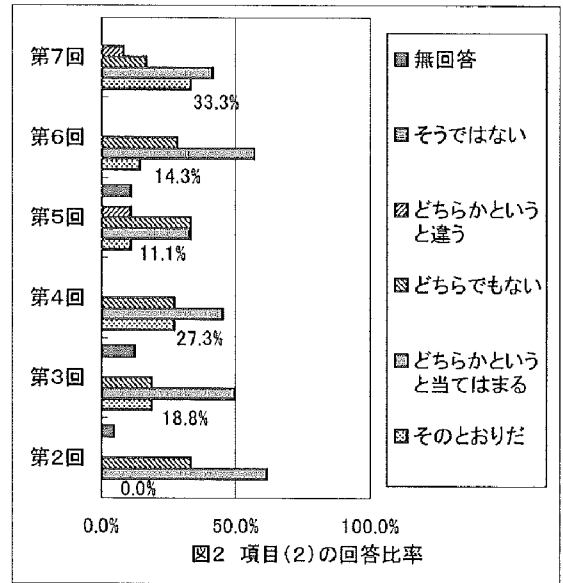
②保護者会の有効性

項目(2)では、「問題解決の方法(ソーシャルスキル)の学習」を行った第7回、「子どもへの関わり方(スキル)の学習」を行った第4回の順に高く(図2)、項目(3)では、第6回、第4回の順に高い比率が見られた。また、保護者の保護者会への期待の結果でも高い比率であった、第3回についても高い比率が見られた(図3)。項目(8)では、第6回、第4回の順に高い比率が見られた(図4)。特に、第4回については、有効性に関係があると考えられる項目すべてに、高い比率が見られた。

③保護者会の限界

アンケート項目の自由記述欄に記載された内容では、第4回は、「自分の問題を話した後、話したりない部分がたくさんあった」という意見や、第7回では、「もう少し先生と意見交換したかった」という内容が見られた。

またフリートークを行った、第5回では、保護者会の有効性に関係があると思われる、(2)、(3)、(8)について「そのとおりだ」と肯定的な回答をした比率が、低かった。この第5回には、適応指導教室通室児童生徒保護者以外の保護者から、学校体制に関する質問が出された。



<考察>

①保護者が保護者会に期待するもの

保護者会の目的はややもすれば自宅で孤立しがちな保護者が他者との交流を深めることによって、気持ちに余裕を生じさせ、しいては子どもに対してより安定したかかわりができることを目的としたところがある。しかし、最近、保護者間ではそれだけでなく、もっと具体的な学習を通して、子どもへの接し方を学習したいとの声も聞く。第1回のアンケートではこの保護者たちの考えを確認することができたといえよう。ただし、具体的といってもアンケートに「～を知りたい」という具体性がなく、保護者の漠然とした子育てについての不安感と挫折感が「具体性」をもとめさせている可能性もある。

実際にグループ・アプローチを行ったところ、子どもと進路をどう考えるという回と、子どもはなぜ学校に行くのか、すなわち、学校に行く条件についての回が、保護者にとって意義があったのは、不登校を正面から取り上げ、将来のことをともに積極的に考えていく会の姿勢が保護者の不安をそのまま受け止めることになったからではないか。

②グループ・アプローチの有効性と限界

保護者会の有効性について

結果の通り、子どもへの直接的なかかわり方を示唆した内容が有効とみとめられた。特に第4回は、子どもへの日常的なかかわり方を考えるものであるゆえ、保護者は気づきとこれからのかかわりについての示唆を得たようである。ただし、これはグループ・アプローチの限界にも関係することだが、保護者が抱える問題は多様であり、各保護者がそれぞれ抱えている問題の具体的な解決にグループ・アプローチで答えることは実に困難である。そう考えると、グループ・アプローチでは、細かい問題への支援よりも、多様な問題に取り組む際に、広く必要になる基本的なスキルや、発想法、気づきなどに関係した内

容を体験することが大切であろう。

同じくアンケートから、「話したりない」、「もっと意見交換がしたい」などの感想があったのは、グループ・アプローチでは、複数の保護者が、限られた時間で自分の意見などを表出しなければならず、一人一人の意見を聞く時間が物理的に少ないことと、発言に積極的な者と発言に消極的な者とは、自分の問題や意見を表出することに差が出ることもあり、グループ・アプローチの限界の一つであると考えられる。

第5回保護者会の比率の低さは、フリー・トーキング中に、適応指導教室通室児童生徒以外の保護者から教室の支援体制についての質問、学校体制に関する不満などの意見が出され、全体として具体的な問題を解決するという視点からはずれた形になったためである。そのような話題が保護者会の中で、生じた一因として、教室通室児童生徒の保護者は、日常の教室スタッフによる個別面談があり、そこで、不安や不満などを解消しているのに対し、教室に通室していない児童生徒の保護者は個別支援の場がほとんどなく、それらを語る場所がないことが考えられた。このことから、グループ・アプローチのみで保護者支援を考えるのではなく、個別にその家族関係の課題をとりあげ、受けとめる個別的支援との並用が大切であることが言えよう。